現存する『啓迪集』の古鈔本について

小曽戸　洋

『啓迪集』八巻は天正二年（一五七四）、当時日本に渡来していた宋・金元・明の医書より抜粋、編纂された曲直瀬道三の代表的著述である。この時代には、それ以前の三点の五山版医書を除いてはいまだ医書の出版は行われておらず、よって『啓迪集』は写本をもって伝承された。同書が印刷品となったのは慶安二年（一六四九）のことである。したがって後世、編著者の生存時に出版が行われた場合とは違って、成書年に近い（出版になる以前の）写本（古鈔本）は大きな価値を有するのである。幸い『啓迪集』は道三自筆本もしくはそれに準ずるもの、あるいは江戸初期までの写本が今日多数伝存している。

演者らは先年来の道三顕彰事業の一環として、目下『啓迪集』の研究を手がけつつある。これにともない、その古鈔本の現存状況について初歩的調査を行ったところ、現時点において一九箇所の図書館ないしは個人に、二八部の古鈔本の所蔵のあることを知った。現在調査中の段階ではあるが、以下にその概況の報告を試みる（所蔵先の50音順）。

▼〔石原明氏旧蔵本〕　全揃八冊。首に策彦周良自筆の題辞、末尾に道三自筆の自序がある。奥書はない。

▼〔大阪府立図書館石崎文庫本〕　全揃八冊。慶長十八～十九年、岡本茂右衛清安写本。『図書総目録』はこれを版本として著録するが誤り。

▼〔大塚敬節氏旧蔵本〕　全揃八冊。識語はない。江戸初期写。

▼〔香川大神原文庫本〕　巻七、一冊。目録に「室町時代写」とする。

▼〔宮内庁書陵部本〕　全揃八冊。首に道三筆の策彦題辞、ついで自筆の自序があり、末尾に「宜帆道救公久入吾室而学診治之業請益歴歳寸陰不懈感其志之真而今也以授斯一部矣固戒妄伝莫忽慎焉〻〻、天正第七己卯年三月吉日、洛下翠竹庵一渓叟道三」の道三自筆奥書（押印・花押）がある。

▼〔研医会図書館本〕　巻二、一冊。江戸初期写。
▼〔国会図書館本〕　全揃四冊。目録に「古写本」とする。
▼〔静嘉堂文庫本〕　①全揃八冊。目録に「自筆」とする。②巻三、一冊。目録に「慶長写」とする。
▼〔尊経閣文庫本〕　全揃八冊。目録に「室町末期写」とする。
▼〔台湾故宮博物院本〕　①全揃八冊。目録に「日本鈔本、朱墨校註」とする。②残本一冊。目録に「日本鈔本、墨筆校註」とする。
▼〔高野守敬氏蔵本〕　巻三、一冊。古鈔本。「浄福寺蔵書」の印がある。
▼〔武田杏雨書屋本〕　①全揃八冊。首に策彦自筆の題辞がある。目録に「自筆稿本」とする。重要美術品。②全揃八冊。目録に「室町写本、道三自筆自序マタ『甫庵蔵書』印アリ」とする。③自序一巻、一冊。目録に「慶長十二、莫不敬軒主翁写本」とする。④巻三・四・六、三冊。目録に「江戸初期写本」とする。⑤全揃八冊。目録に「正保三、紀陽南山就安斎玄幽写本」とする。⑥巻五、一冊。目録に「写本」とする。
▼〔東大鶚軒文庫本〕　全揃八冊。目録に「天正十写」とする。
▼〔東京国立博物館本〕　①五冊。目録に「江戸初写」とする。②もう一部あるらしく、『国書総目録』に「八冊」本を載せる。
▼〔東洋文庫藤井文庫本〕　一冊。策彦題辞、道三自序を含む巻一零本らしい。
▼〔内閣文庫本〕　①巻一・二・四・七・八、五冊。巻首を欠くが、目録には「天正写、自筆等」とする。②巻二・三・六、三冊。目録に「室町写」とする。
▼〔曲直瀬陽造氏蔵本〕　曲直瀬亨徳院家伝承本。東京国立博物館に寄託中とのこと。
▼〔三原市立図書館本〕　①全揃八冊。巻首に道三筆の策彦題辞、ついで自筆の自序があり、末尾に「就当流医道執心励憤悱之志頃遂於在洛晨昏列講座而勉学無懈矣予感彼至勤而援之以啓迪一部猶謹救済之志而可仰可信勿軽勿忽云、于時天正十一歳舎癸未菊節、洛下翠竹院一渓叟道三、松林軒、薬局右」の道三自筆奥書（押印・花押）がある。松林軒は出雲の人、姓は水野。県重文指定品。②巻五、一冊。

古鈔本。

以上、未見のものも多いが、従来自筆本と称されてきたもの、たとえば三原市立図書館本などは詳細に見ると、序、奥書、各巻首の書題・署名までが道三自筆で、本文は書体は酷似するが別人の手によるもののようである（自筆本の臨模か）。道三のもとで学業を終えた門人に自ら序跋等を揮毫して授与するならわしであったのだろう。印刷医書の行われない時代ならではの美風である。今後さらに多くの実見を重ねたいと考えている。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室）

松下見林とその師古林見宜

岡田安弘

松下見林に就いては既に識られている通り、医家としてよりも日本歴史上の貢献の大きい史家・神道家として有名であるというべきであろう。もしこの人が居なかったならば、今日の日本古代史の隆盛はなかったと言われる。それはその著書『異稱日本伝』のためで、見林が人を長崎へ派して購求した漢籍は、本書に引用されているだけで百三十種に上る。今日誰にでも引用されている書物――山海経・後漢書・魏志・史記・晋書・隋書・新唐書・旧唐書・太平御覧・三国史記等は総てこの中に含まれる。当時の日清韓三国間の文物交流の薄さから考えると驚くべきことと言わなくてはならない。

見林は河内の人で、自ら楠氏の子孫と称している。尊皇